どもなり、廿七日、利休事もさたのみ也、

〔豐臣秀吉譜中〕天正十八年十二月、千宗易利休精于茶湯者也、秀吉酷嗜茶湯、故宗易受其恩眷厚矣、世人頗敬之、宗易撿定茶器之新舊可否、而決其價數、因是家得富贍、宗易與大德寺僧宗陳（號古溪）相議彫己木像置之于寺内山門上、頃年宗易含私僻之意、其見茶器也、依與己親疎好惡之異同、而或以新爲舊、或以否爲可、以假爲眞、高下其售、屢多騙人、秀吉聞之怒曰、是國賊也、國賊不禁、則予之大過也、豈不釀將來嘲乎、卽收宗易誅之、大權現（○德川家康）利家、細川越中守忠興、德善院法印玄以等、受秀吉之命、赴大德寺、欲摧破之、爲罪宗陳置宗易木像于山門上也、乃往寺召宗陳等長老數輩而詰難之、宗陳密插刃於懷中、不敢喪精曰、佛法之通塞、時節到來耳、與奉行等相互問駁、而遂不屈、宗陳意蓋謂、事若不得已、則必把其短刃、自貫亢而死耳、亦何傷乎、故辭氣最壯、大權現熟視曰、宜憑玄以謝罪而解、秀吉之怒也、玄以歸而言之、秀吉宥之、因是不破却大德寺、其後秀吉梟宗易首於一條反橋下、揭彼木像使踏其首、以柱夾立之數日、視者如市、

〔茶窻閒話中〕利休のむすめおさん万代屋へ嫁して、子も有て後に若後家となりしが、天正十八年の春、世中靜になりしかば、秀吉公諸大名の方へ御成りもさげく、御茶の湯御能等もをりをりあり、又御鷹野にも毎々御出ありし、彌生のはじめつかた、東山邊へ小鷹狩に御出なされ、南禪寺の前より黑谷邊へさしかゝり給ふ、御供には佐々淡路守、前波半入、木下半介、其外御小姓三人許にて、御自身御鷹をすゑられ、山陰の細道を過給ふ所に、むかふの方より女一人下女二三人めしつれ、乘物を後につらせ、破籠やうの物あやしき下部に荷はせ、山々の花の梢をながめやり、いと靜なる體にてかちよりぞ出來りけり、木下半介御先へ立て扇をあげ、上樣の御成なるぞ、笠帽子をぬげよとよび、供の下部は乘物を田の中へすゑ頭を地につけぬ、かの女房はうちおどろきたれども、とり去づめたるけはひにて、帽子をばぬぎ、額綿ばかりにて、枝たけ咲